

実習指導者の実習指導上のスタイルに関する一研究

- 実習指導経験 10 年以上の実習指導者へのインタビュー調査を通して -

長崎純心大学大学院 井上 由起 (会員番号・007884)

山田 勝美 (山梨立正光生園・002051) 松永 公隆 (長崎純心大学・002976)

山田 真由美 (長崎純心大学・007885) 横山 智美 (長崎純心大学・007883)

キーワード： 実習指導者 実習指導スタイル 困難性

1. 研究目的

社会福祉士養成における実習指導者の重要性は自明のことである。その質的向上をはかるため 2007 年より実習指導者講習会の受講が義務づけられたのもそうした趣旨をふまえたものであるといえよう。

そこでは、実習生をアセスメントし、その把握のもとでスーパービジョンを展開することの重要性は指摘されてはいる。(村井、2008)だが、その際には、実習指導者は、自らの実習指導上のスタイルをふまえたうえで、実習生と関係構築もしくはスーパービジョンを展開する必要があるとあってよいのではないだろうか。実習指導者として、何らかの傾向があり、その傾向をふまえ、指導を行っていく必要があると考えるからだ。

山田ら(2011)は指導者と教員の協働のあり方に関する研究において、実習指導/スーパービジョン(以下、SV)においては、「実習指導者には実習生像があり、それに近づけようとすることがあること、そこに近づけない場合、実習指導者は負担感や困難さを抱える可能性があること、その意味で実習指導者にも自己覚知が求められる」と指摘している。この研究では、1 事例による事例研究を行っているが、実習生の消極性に対して指導者が「あるべき実習生像」を求めてしまったことから、両者の関係形成に「困難さ」を抱えていたことが明らかになっている。しかしながら、その困難さを克服するための手段や方法を明確化できなかった。しかも事例は実習指導経験 5 年未満の 1 事例であり、方法論上の限界が課題となっていることから、さらなる事例研究を積む必要がある。

そこで、本研究では、実習指導者の指導上のスタイルとはどのようなものであるか、そのことが実習指導上の課題とどのように関連しているのか、その課題を克服していくために何が大切となってくるのか、以上のことを探索的に研究していくことを目的とする。

なお、ここでいう「スタイル」とは、実習指導上の実習指導者自身の傾向及び特徴を指し示すものと暫定的に定義しておくこととする。

2. 研究の視点および方法

研究対象は、社会福祉援助技術現場実習(社会福祉士実習)の実習指導経験年数が 10 年以上の 3 名(A、B、C)を対象に、2 回の調査を実施した。1 回目の調査は平成 22 年 9 月 11 日に約 2 時間のグループインタビューを行い、安梅ら(2010)の調査方法を参考にした。質問項目は、これまでの実践経験について尋ねたうえで、主として「現場の実践で大切にし

ている点」「実習指導で大切にしていること」について尋ねた。

また、1回の目の調査をふまえ、さらに詳細な検討を行うため、2回目の調査は平成23年2月1日から2月8日の間にそれぞれ1回ずつ個別インタビュー方式にて実施した。所要時間は、それぞれ約1時間～1時間30分程度で、質問項目及び分析方法、インタビューイの基本属性など詳細については当日報告することとしたい。

3. 倫理的配慮

インタビューの実施に当たっては、本研究以外にデータを使用しないこと、守秘義務を遵守することなど伝えた上で、調査の協力を得るとともに、ICレコーダーの録音の許可を得た。個人情報保護の観点から、インタビューイの名前及び個人が特定しないように配慮を行った。

4. 研究結果

調査の結果、Aの場合、「実習生と指導者が共に学ぶこと」「共に成長すること」であり、そのための「自由に学べる環境」として「語りの保障」や「学生との関係づくり」をSVで大切にしていた。また、Bの場合、「実習生の言うことを否定しない」「受け入れること」「実習生のペースを大事にすること」を大切にしていた。Cの場合、「職員になるための実習であってボランティアではない」ということを念頭に置き、実習生の「自主性」を引き出すことを大切にしていた。

こうしてみると、Aは、「対等な関係性を重視する」というスタイルであるといえ、Bは、「実習生のありのままを受け入れる」スタイルであるといえよう。他方、Cは、「自主性尊重」スタイルといえる。このように実習指導者には、実習指導上、大切にしたいことがそれぞれスタイルに反映されていることがみえてくる。

このことは、逆にいえば、そのスタイルに合わない学生と対面した時に、指導上の困難さとして浮き上がってくることになる。Aは、「学生との関係づくり」と、「学生の語りを引き出すことができていない」と感じる時、SVの困難さを感じていた。「共にある」というスタイルが形成できないゆえであると推察される。Bは、「やる気のない」「何をしに来たのかわからない」実習生に対し、困難さを感じていたことが明らかになった。これは、「ありのままを受け入れがたい」場合であるといえよう。Cの場合、「社会人としての基本的なマナーができていない場合」、つまり、自主性を尊重できる程度までに学生が到達できていない場合に困難さが浮上すると考えられる。

こうした困難さに直面した際には、Aは教員の実習訪問を活用していること、生活者としての曖昧さを残しておく姿勢で実習生と関わっていることがわかった。またBは、利用者に対して共感していくように、実習生に対しても共感する姿勢をもって接すること、人の歴史性をどう捉えるかという視点を持つことで対処していることもわかった。